

# いつから「哲学対話」なんて呼ぶようになったんだっけ?: 名称の定着をめぐる

小川泰治 (宇部工業高等専門学校)  
ogawa-t@ube-k.ac.jp

関東でカント倫理学研究に挫折しつつあるなか「哲学対話」なるものに出会い、気づけば今は山口の高専社会科教員、仕事にも慣れてどんどん先生っぽくなってることに戸惑う優等生系哲学対話実践者。

# 話す予定のこと

## 1. 問題意識（どういうことが気になっているのか）

- 私のこと
- 「哲学対話」という呼称
- 特に「対話」とそれを呼ぶことについて

## 2. 哲学対話、子どもの哲学、哲学カフェという語の研究論文タイトルでの登場頻度調査

- 「哲学カフェ」や「子どもの哲学」は2000年代初期から使われている
- 「哲学対話」は2017年ごろから頻度が増えていることがわかって

## 3. Philosophy 「for or with」 Childrenの呼称問題をめぐる議論

- 「子どものための(for)哲学」という名称と「子どもとともにする(with)哲学」という名称の力点の違い
- N. Vansieleghem/D. Kennedy(2011) “What Is Philosophy for Children, What Is Philosophy with Children-After Matthew Lipman?” *Journal of Philosophy of Education* 45 (2): 171–82.

## 4. 考察を通していま考えていること

## 問題意識：私のこと

- **2012年**に上智大学の**寺田俊郎さん**および学生で都立中等教育学校の授業で「哲学対話」を企画、実施したのが最初。(Cf: 小川 2021)
- そのころから「哲学対話」という表現を発表資料でも用いていた。ただし、論文のタイトルなどは「子ども哲学」にすることも。
- 2020年ごろからは論文タイトルなどでも「哲学対話」という言葉を使う。ただし、**最初に注をつけて、それが「総称」であることに注意を払って。**
- **学校の授業でも「哲学対話」という言葉を便利なので使い続けている。**
- 去年の本会で「Pネーム」をめぐる発表(小川 2023)をした前後から「名前」をめぐる問題が気になっている。

さまざまな実践手法が流れ着いて定着した「哲学対話」。

**これは厳密な方法論をもつ「手法」ではない。**

**にもかかわらず、あたかも「手法」であるかのように見える。**

その名称を使い続けるのか、引き下がるのか、いずれにしても、どういう流れで「哲学対話」が定着してきたのか、確認・反省しておきたい。

## 問題意識：実践をどう名づけるか

■「哲学」と「対話」どっちを重視するのか？

■「哲学的対話」と「ふつうの対話」はどう違うのか？

■そもそも「対話」とはなにか？「対話」と「会話」の違いは？

- これらの問いは、哲学対話という名称がいつのまにか固有名詞っぽくなってしまったからこそ生まれた問いであり、そんな名称がなければ問わなくてもよかった可能性がある、という意味で疑似問題っぽくもある
- 同じ実践を仮に「哲学共同探究」とでも呼んでいれば、上記のような疑問はそもそも出てきづらいのではないか

実践の名前をどう名指すかによって、実践への着眼点や注目のされ方、問いの立ち方が変わってくることもある。

「哲学対話」という名称はだれにとって便利で、都合がよいものなのか。

## 問題意識: 「哲学対話」という用語のめんどうさ

### 『哲学対話と教育』(2021)

“本書で「哲学対話」という言葉を断りなく使っているが、これは、2010年頃から、哲学カフェ、こどもの哲学、職業人のための哲学などの哲学的対話を実践する人々の間で、いつの間にか広く使われるようになった言葉である。**四文字熟語風で座りがよく、どこか術語のようでもあり、何か定まった定義や共通理解があるような印象を与えるが、そのようなものはない。**ここではただ「哲学的対話」の略称として用いていることを、お断りしておく。”

(viii, 執筆者は寺田俊郎)

タイトルやフレーズとしては「座りがよい」が、一方で、「定まった定義」があるとの誤解を招かないための「断り」が必要

## 問題意識:単なる総称としての「哲学対話」1

”哲学対話という言葉が国内では一つの総称として、学校のようなコミュニティベースでの実践と、不特定多数の人が集まる単発の場での実践の両方を含むものとして理解されている、ということである。多義的な現象を一括りにまとめる便利な言葉を（なんでも放り込める旅行かばんに例えて）「スーツケースワード」とよぶことがあるが、**哲学対話という言葉がスーツケースワードとして機能していることにより、本来切り分けて考えるべき実践ごとの範囲や前提認識の違いがみえづらくなっている側面があると筆者らは考える。**”

(山本・小川 2023:132)

## 問題意識:単なる総称としての「哲学対話」2

”「哲学対話」という言葉やそれが指す実践は広がりを見せ、この4文字の言葉を示すだけでそこには普遍的な共通性があり、同じ課題があるかのように見えてしまうかもしれない。たしかに、対象がだれであろうと、その実践が継続的なものでであろうとなかろうと、人々とともに対話を通して哲学することの根幹は変わらないかもしれない。だが、**実際に参加者とともに哲学していくためには、実践の共通性よりも差異にこそ慎重に向きあわなければいけない。哲学対話という言葉はこの当たり前のことを見えにくくしてしまう。**いま自分が哲学を、そして対話をとともに行いたいと考えている人たちはだれなのか、そしてその人たちと対話をしていくためにはどのような困難が想定され、そのためにはどのような環境が必要なのか、こういったことを具体的かつ丁寧に考えていくことがなにより必要である。”

(山本・小川 2023:133-4)

## 問題意識: 「対話」

- 「哲学対話」にはルーツとなる海外の実践や研究がある
  - それは、philosophical practice, philosophy café, Philosophy for children, philosophical inquiry with children, **Socratic Dialogue** についてのもの
  - **必ずしも philosophical dialogue といった言葉が頻出するわけではない**
- 国内のさまざまな展開の果てに、**対話という言葉を含む名称が定着しただけ。我々は「対話とは何か」を十分に知らない**
- 「対話とはなにか」を考えるときには、外部の説明（「オープンダイアログ」やボーム『ダイアログ』、etc…）あるいは、哲学そのものの権威（ソクラテス＝プラトンの対話篇、ブーバーの「我-汝」など）に頼っている。



## 問題意識: 本発表をめぐる問い

### ■表の問い

- いつから「哲学対話」なんて呼ぶようになったんだっけ?
- だれが (なにが) 「哲学対話」と呼ぶことにした (させた) のだろうか?

### ■裏の問い

- 「哲学対話」という総称を用いることでなにが起きている?
- そもそも私はこの名称の定着をなぜ「問題」だと感じているんだろう?

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

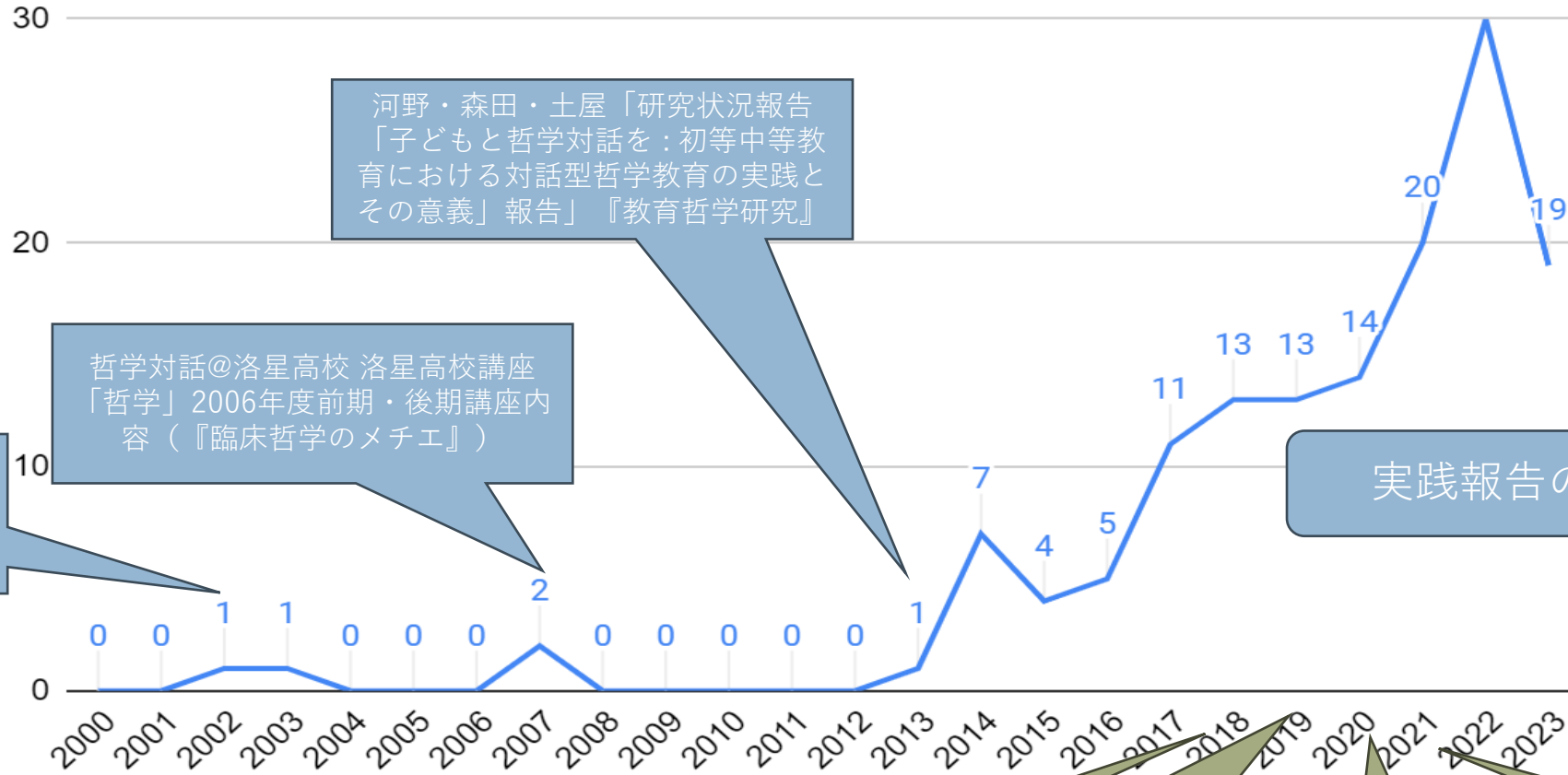
### 「哲学対話」等の論文タイトルにおける登場頻度調査

- 調査時期：2023年10月
- 調査に用いたウェブサイト：CiNii Research <https://cir.nii.ac.jp/>
- 調査方法：**論文タイトル**として以下の項目を検索して件数を調査。そのうえで、検索エンジンの仕様上、重複でヒットしたものや別文脈のものなどを目視で除き、**実数**を確認した。
  - ※「タイトル」検索のため、キーワードなどに含まれているものは拾えていない場合がある
  - ※『**みんなで考えよう**』（哲学プラクティス連絡会機関誌）、『**思考と対話**』（日本哲学プラクティス学会学会誌）はCiNiiに載らないため**カウント外**
- 調査項目：
  - － 「**哲学対話**」
  - － 「**哲学カフェ**」
  - － 「**子どもの哲学／子どものための哲学**」

調査に協力していただいた宇部高専の縄田涼馬さん、関穂乃香さん、ありがとうございました。

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

### 哲学対話



河野・森田・土屋「研究状況報告  
「子どもと哲学対話を：初等中等教育における対話型哲学教育の実践とその意義」報告」『教育哲学研究』

哲学対話@洛星高校 洛星高校講座  
「哲学」2006年度前期・後期講座内容（『臨床哲学のメチエ』）

会沢「哲学対話の  
ツールを求めて」  
（『臨床哲学のメ  
チエ』）

実践報告の増加

梶谷『考えるとはどうい  
うことか 0歳から100  
歳までの哲学入門』

土屋『僕らの世界を作り  
かえる哲学の授業』

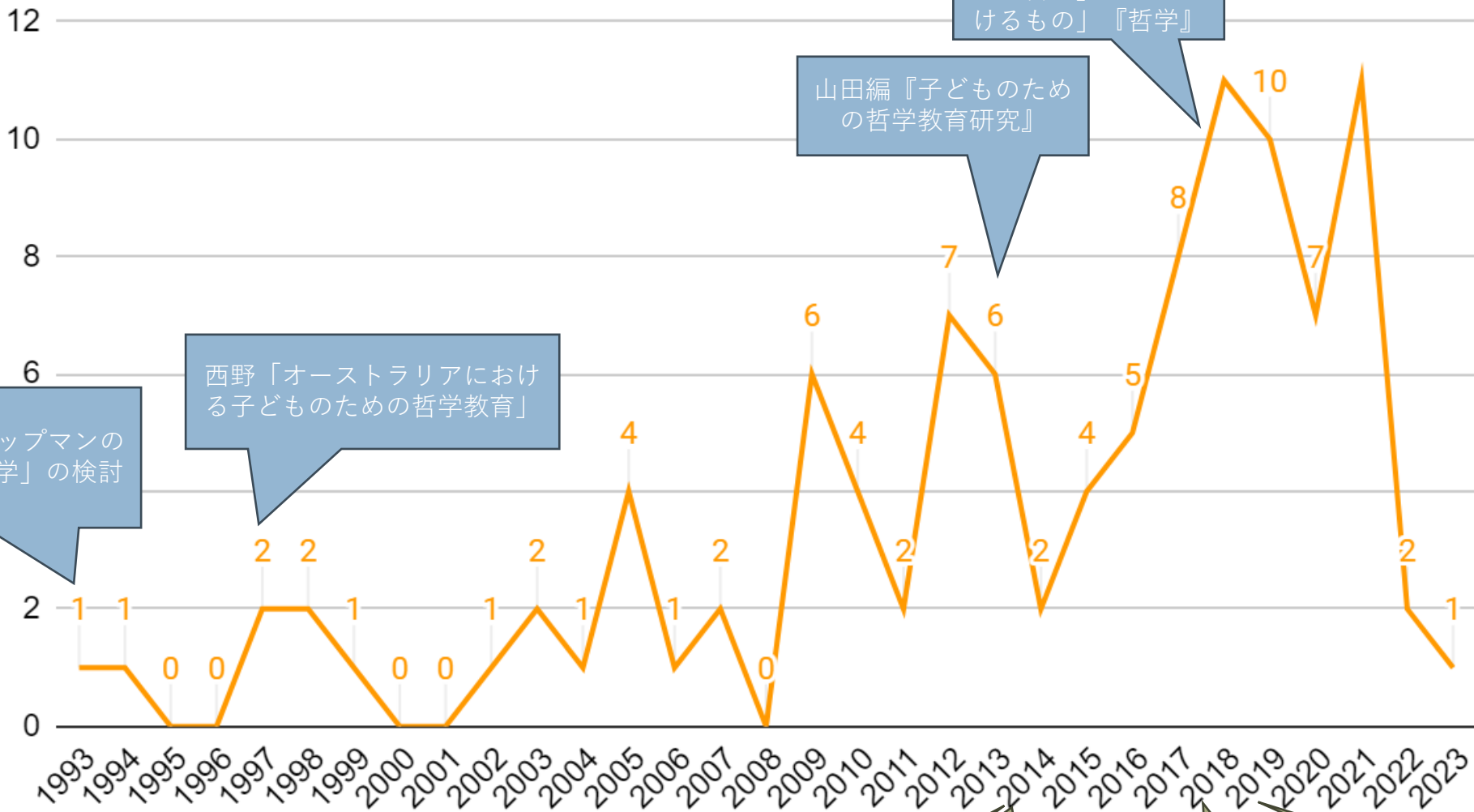
寺田編『哲学  
対話と教育』

河野ら『ゼロからはじめ  
る哲学対話：哲学プラク  
ティス・ハンドブック』

2023. 11. 18 哲学プラクティス連絡会 第9回大会 プレゼンテーション・ハンドブック

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

### 子どもの哲学／子どものための哲学



安藤・渡辺 M.リップマンの「子供のための哲学」の検討

西野「オーストラリアにおける子どものための哲学教育」

山田編『子どものための哲学教育研究』

村瀬・土屋「「子どもの哲学」が問いかけるもの」『哲学』

リップマン『探求の共同体』

河野『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』

高橋・本間『こどものてつがく』

アーダコーダ『こども哲学ハンドブック』13

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

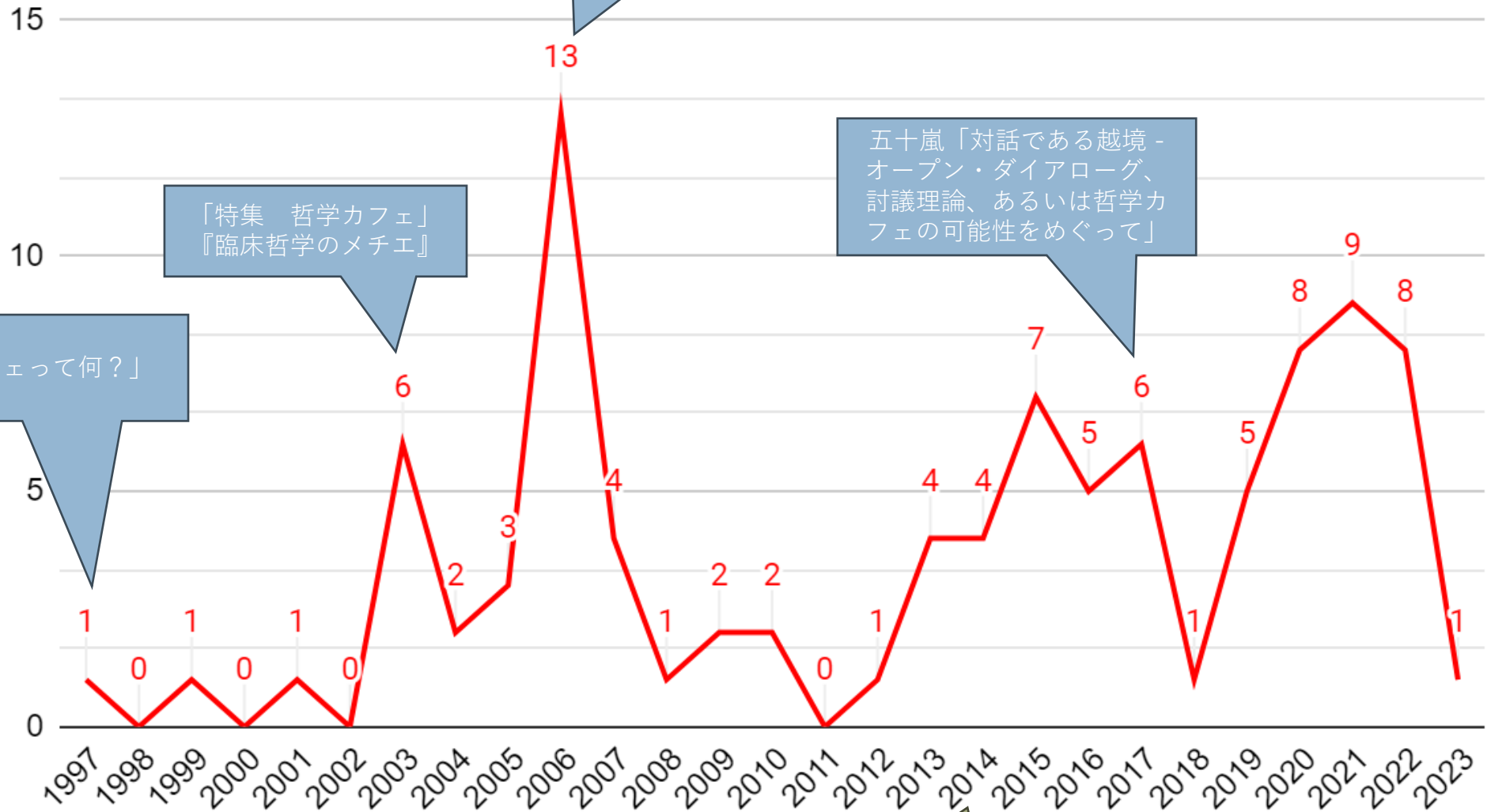
### 哲学カフェ

阪大臨哲関係者「哲学カフェへようこそ(1)～(12)」

「特集 哲学カフェ」  
『臨床哲学のメチエ』

五十嵐「対話である越境 -  
オープン・ダイアログ、  
討議理論、あるいは哲学カ  
フェの可能性をめぐる」

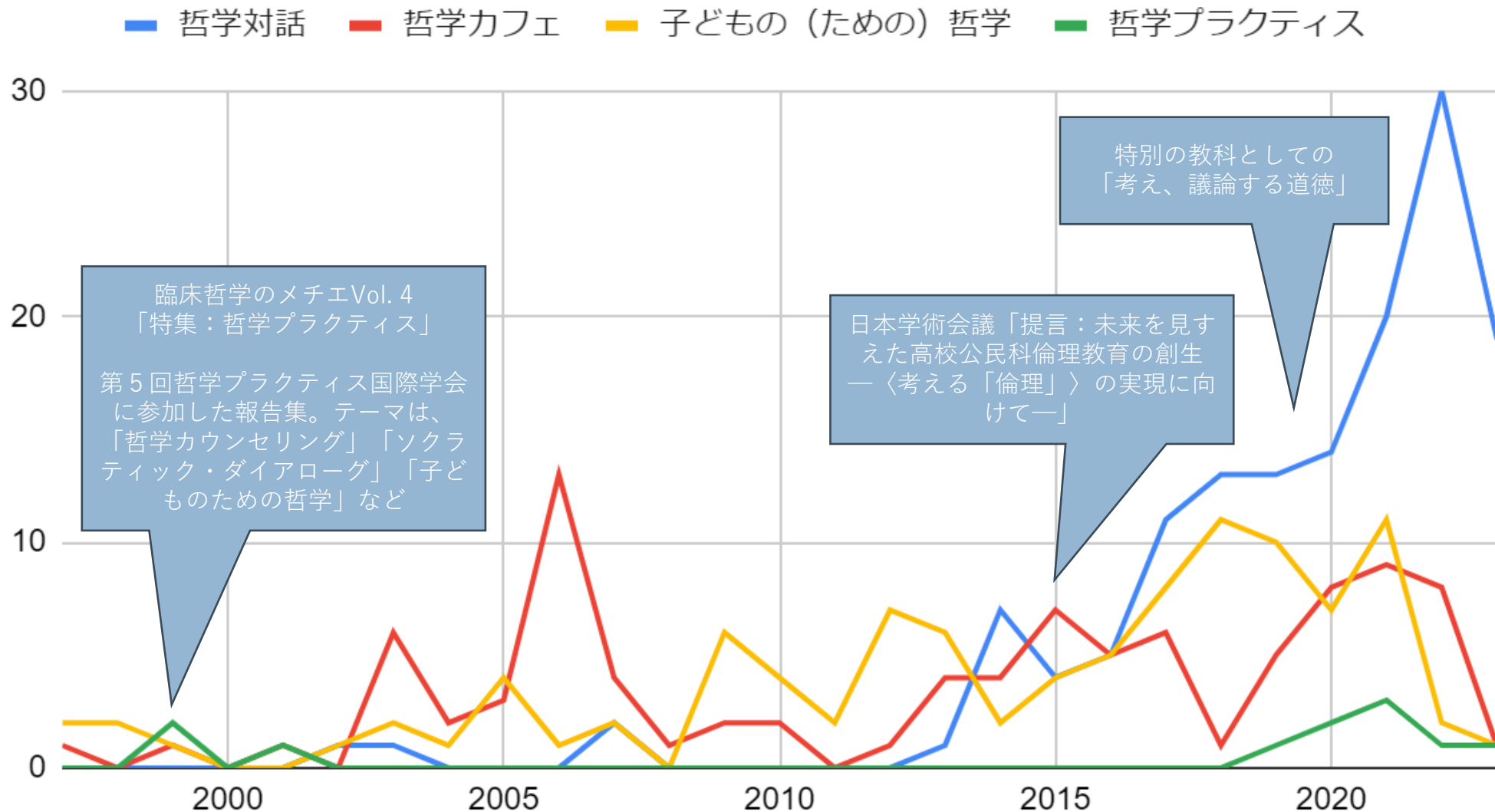
鷲田「哲学カフェって何？」



2023. 11. 18 哲学プラクティス連絡会 第9回大会プレセッション  
カフェフィロ『哲学カ  
フェのつくりかた』

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

### 哲学対話、哲学カフェ、子どもの（ための）哲学



臨床哲学のメチエVol. 4  
「特集：哲学プラクティス」  
第5回哲学プラクティス国際学会  
に参加した報告集。テーマは、  
「哲学カウンセリング」「ソクラ  
ティック・ダイアログ」「子ど  
ものための哲学」など

日本学術会議「提言：未来を見す  
えた高校公民科倫理教育の創生  
—〈考える「倫理」〉の実現に向  
けて—

特別の教科としての  
「考え、議論する道徳」

上記調査をふまえると…

2000年代から2010年代前半の研究や実践を担ってきた大阪大学臨床哲学研究室周辺の文献調査が必要そう

書籍に当たってみることにする

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

# 『臨床哲学のメチエ』 Vol.4(1999)

## 初期実践者たちの「ソクラティック・ダイアローグ」への注目

- 特集：哲学プラクティス
- 第5回哲学プラクティス国際学会に参加して 中岡成文 4
- 子どものための哲学・子どもとともにする哲学 寺田俊郎 8
- 「ともに考える」ための道具 "**Socratic Dialogue**" の経験から 堀江 剛 14
- 思考の現場 哲学プラクティスと臨床哲学 本間直樹 19
- 二つの国際学会のホスピタリティについて 仁平雅子 24
- ソクラティック・ダイアローグ** in Osaka 馬嶋裕・大北全俊 25



## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

# 『ドキュメント臨床哲学』(2010)

### ■哲学カフェの説明

“いろいろな年代の市民に十数名集ってもらい、そこで数時間、みなの共通の関心を惹きそうな問題について、**議論**するのだ。ルールはすこぶる単純である。たがいに名前しか言わないこと（出自や勤務先や家族関係や居住地域をあきらかにしないこと）、手を挙げて司会者に指名されてから発言すること、他人の話は最後まで聴くこと、そして他の思想家の意見を引かずに自分の言葉で語ること。”

(ix, 執筆者は鷺田清一)

■鷺田は「哲学（的）対話」といった言葉遣いは上記文献では使っていない

■ただし、別文献で「対話」の原義に戻る以下のような表現はしている

「哲学カフェは哲学における**ダイアローグ（ロゴスを分けあうこと）**の復権」  
(鷺田 1999)

「**哲学的に話すことはまたモノローグではありません**、（潜在的には）哲学的に聴かれるという契機を内包しているはずだということになる。」(鷺田 1997)

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

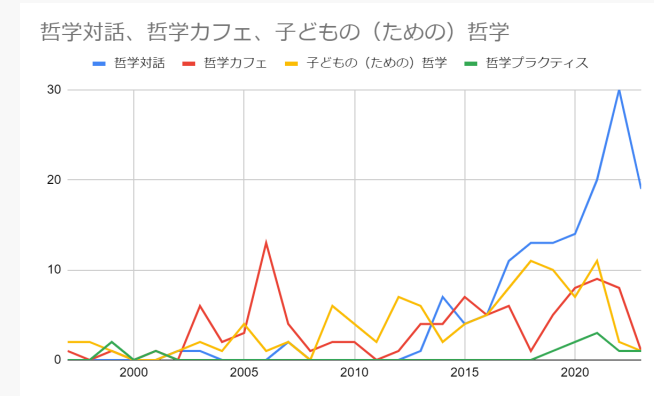
### 『哲学カフェのつくりかた』(2014)

- 「おしゃべりから**対話**へ」 (松川)
- 「**対話**にウマイヘタはない」 「**対話技法論**」 (ほんま)
- 「政治的な討論ではなく、**哲学的な対話**」 (寺田)
- 「カフェフィロと**哲学対話**のこれから」 (高橋)
  
- 「何をイメージしてやっていたかということ、**ネオ・ソクラテイクダイアローグ**なんですよ。」 (寺田)

## 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

### 小括

- 論文のタイトルで「哲学対話」という言葉が増えてきたのは、2010年ごろ以降。それ以前は「哲学カフェ」や「子どもの哲学」のほうが好まれる傾向。（予想通り）



- 国内の実践や研究を初期(2000年代~2010年代前半)にリードしていた大阪大学臨床哲学研究室関係者の言葉のなかにはかなり早い段階から「対話」や「哲学（的）対話」という表現が見られる。（予想外）
  - **哲学プラクティス国際学会から「輸入」された「ソクラティック・ダイアログ」の影響**
  - 臨床哲学系の教員が担当する「**対話技法論**」（2002~）の影響

# 問題意識:本発表をめぐる問い

## ■表の問い

### 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

- いつから「哲学対話」なんて呼ぶようになったんだっけ?
- だれが（なにが）「哲学対話」と呼ぶことにした（させた）のだろうか?
- ・ 初期から実践者や研究者同士のやりとりのなかでは言葉としては共有されていたらしい。一連の**実践がある種の「対話」であるという共通の認識もできていた**ように見える。
- ・ ただし、**実践の「総称」であり、明確な「手法」であるかのような現在の認識とは異なる**のではないか。



## ■裏の問い

### 3. Philosophy 「for or with」 Childrenの呼称問題

- 「**哲学対話**」という**総称を用いることでなにが起きている？**
- **そもそも私はこの名称の定着をなぜ「問題」だと感じているんだろう？**

### 3. Philosophy 「for or with」 Childrenの呼称問題

## P4C研究者の世代論(Vansieleghem&Kennedy 2011)

■Journal of Philosophy of Education, Vol. 45, Issue 2で組まれたP4C関連の特集号の巻頭論文。概説的要素と理念的主張を含む。

■冒頭で”Philosophy for children (P4C)”という語についての注

- この語はヨーロッパの実践者のあいだで論争対象になってきた
  - ①IAPC（リップマンらが作った子どものための哲学推進研究所）によって開発された特定のカリキュラムを意味する言葉であって、一般的に使用すべきではない
  - ②「for」という単語には大人が子どもに与えると活動であるといったパターンリスティックな意味合いがある。
  
- 当該論文（およびそれを含む論集）では、以下のように使い分ける
  - 特にIAPCのプログラムに言及する場合はPhilosophy for Children
  - そうでない場合は、著者の好みに応じて、  
philosophy for children, philosophy with children, philosophy for/with children

## P4C研究者の世代論(Vansieleghem&Kennedy 2011)

- 第一世代：リップマン／マシューズ／マルテンス
  - 教育現場において批判的思考を育む手段としてのP4C（リップマン）
  - 大人と子どものギャップを埋める手段としてのP4C（マシューズ）
  - 権力のメカニズムを再構築し、コミュニケーションによって個々人にとっての意味を熟考するための戦略としてのP4C（マルテンス）
- 第二世代：Ann Margaret Sharp, David Kennedy, Karin Murriss, Walter Kohan, Michel Sasseville, Joanna Haynes, Jen Glaser, Oscar Brenifier, Michel Tozzi, Marina Santi, Barbara Weber and Philip Cam

**“第一世代に特徴的だったのは、公立学校教育に場所を得るという野心から、戦略的に画一的なアプローチを重視したことである。一方、第二世代はこのような考え方とは決別し、[実践の]差異を普及や発展の原動力として歓迎した。”(172)**

## P4C研究者の世代論(Vansieleghem&Kennedy 2011)

### ■第二世代

- 第一世代において重視されていたような統一性や一貫性、また普遍的な理性による思考といった要素は目的そのものとはならない
- 第二世代においては、手法やアプローチは各々のコミュニティの文脈に合わせて異なる
  - おおまかなコンセンサス：「P4Cは合理的な議論と思慮深い意見のやりとりを促すものだ(promoting the exchange of rational argument and thoughtful opinion)」(178)
  - **forからwithへ 「子どもとともにする哲学」**

**“前置詞の変更は重要な差異の指標であり、これは哲学の教授法において基本的で不可欠であるとして、対話dialogueがさらに強く強調されていることを示している。つまり、もはや分析的な理性の理想形をモデル化して指導するものとしてではなく、[子どもと大人とが]共に行う反省、熟考、コミュニケーションを生み出すものとして捉えられている。”**(178)

## P4C研究者の世代論(Vansieleghem&Kennedy 2011)

“第二世代はもはや**子どものための／とともにする哲学を方法として**は語らない。むしろ、それぞれ独自の**方法、技術、戦略**を備えた、様々なアプローチの**寄せ集め(medley)**を包括する**運動(movement)**として語るでしょう。”(178-9)

“P4Cがどんなものになっていくかということは決して**確定してな**どいない。[...] それは**形成されるのではなく創造されるもの**だ。したがって、**P4Cは単なる問題の解決策として現れるのではない**。そうではなく、**ある種の経験のなかで浮かび上がってくるもの**であり、**他の共存する理論や実践と結びつき**、**歴史と決定を与えつ**つ、**同時に新しい何かへの扉を開くもの**として構築されていくのである。”(180)



### 3. Philosophy 「for or with」 Childrenの呼称問題

for からwithへ

このエピソードが本当ならwithが最初に使用された時期は1992年ごろ。  
リップマン自身の要請による。

“Murrissが絵本を使ったP4Cのアプローチを独自に開発した  
1992年ごろ、リップマンは、**明確化を理由に「子どものため  
の哲学」や「P4C」というフレーズを使わないように要請し  
た。**それ以来、MurrissはPhilosophy with Children : PwCという  
言葉を使うようになったが、**この名称は実践の民主的で協力的  
な性格**—大人が子どものためにする哲学ではなく、大人が  
子どもとともにする哲学—**を表す言葉として、他の人々にも  
受け入れられている。**PwCの実践者たちは、教材の選択にお  
いて違いがあるが、**全体としては、PwCの教育法として「探  
求の共同体」**についてのコンセンサスがある。”

(Haynes and Murriss, 2011, 299-300)

## 小括

- 第二世代は自分たちの実践や考えとそれ以前のものを区別するために意識的にPhilosophy for Childrenという言葉避けるようになっていき、その過程で「対話」が強調されてきた。(Cf. castillo 2020.)
- 第二世代はP4Cを画一的な「方法」をもつものではなく、様々なアプローチの「寄せ集め」による「運動」として、また、文脈に応じて中身が変化し、「創造」され続けるものとして提示した。こういったアイデアにより、現在までの多様な実践の発展へとつながっていると思われる。

“P4Cは、明確に定義される**職業**(well-defined occupation) やある程度は**はっきり限定された活動**として提示されるのではなく、むしろ**創造され、更新、交換、変異**という制約を受ける**概念**として提示されるだろう。” (180)

# 問題意識:本発表をめぐる問い

## ■裏の問い 3. Philosophy 「for or with」 Childrenの呼称問題

- 「哲学対話」という総称を用いることでなにが起きている？
- そもそも私はこの名称の定着をなぜ「問題」だと感じているんだろう？
- **P4Cが、（哲学カフェが、ソクラティック・ダイアログが、臨床哲学が）、何を批判し、どういった「運動」としてその実践や理論を練り上げてきたのかが、「哲学対話」という（一見、明確な「方法」や「職業」につながるかのような）名前にしてきたことで見えなくなってきたくないか？**
  - 「哲学対話」は果たして、いまある種の画一的な手法として受け入れられてしまっていないか？（そうだとすると、それでもいい、のか？）
  - むしろ最近「簡単なルールのもとである問いについてあーだこーだ話し合うこと」くらいを意味する一般名詞に（再び）近づいている？

### 日本の文脈での「哲学対話」論の必要性

どのような文脈のこういった背景での実践なのか、を丁寧に、「寄せ集め」ること

## 問題意識:単なる総称としての「哲学対話」2

”「哲学対話」という言葉やそれが指す実践は広がりを見せ、この4文字の言葉を示すだけでそこには普遍的な共通性があり、同じ課題があるかのように見えてしまうかもしれない。たしかに、対象がだれであろうと、その実践が継続的なものでであろうとなかろうと、人々とともに対話を通して哲学することの根幹は変わらないかもしれない。だが、**実際に参加者とともに哲学していくためには、実践の共通性よりも差異にこそ慎重に向きあわなければいけない。哲学対話という言葉はこの当たり前のことを見えにくくしてしまう。**いま自分が哲学を、そして対話をともに行いたいと考えている人たちはだれなのか、そしてその人たちと対話をしていくためにはどのような困難が想定され、そのためにはどのような環境が必要なのか、こういったことを具体的かつ丁寧に考えていくことがなにより必要である。”

(山本・小川 2023:133-4)

# 問題意識:本発表をめぐる問い

## ■ 表の問い 2. 研究論文タイトルでの登場頻度調査

- いつから「哲学対話」なんて呼ぶようになったんだっけ？
- だれが（なにが）「哲学対話」と呼ぶことにした（させた）のだろうか？
- ・初期から実践者や研究者同士のやりとりのなかでは言葉としては共有されていたらしい。一連の**実践がある種の「対話」であるという共通の認識もできていたように見える。**
- ・ただし、**実践の「総称」であり、明確な「手法」であるかのような現在の認識とは異なる。**



## ■ 裏の問い 3. Philosophy 「for or with」 Childrenの呼称問題

- 「**哲学対話**」という**総称を用いることでなにが起きている？**
- **そもそも私はこの名称の定着をなぜ「問題」だと感じているんだろう？**
- ・P4Cが、哲学カフェが、ソクラティック・ダイアローグが、臨床哲学が、それぞれ何を批判し、どういった「運動」としてその実践や理論を練り上げてきたのか、「哲学対話」という（一見、明確な「方法」や「職業」につながるかのような）名前にしてきたことで見えなくなってきたくないか
- ・哲学対話は果たして、いまある種の画一的な手法として受け入れられてしまっていないか？
  - ・日本の文脈での「**哲学対話**」論の必要性：それぞれの**実践者がどのような文脈でどういった手法でどういった背景で実践をしているのか、を丁寧に、「寄せ集め」ること**

## みなさんと考えてみたいこと

- 私の問題意識、ちょっと偏っている（こじらせてる？）気もするのですが、伝わりましたか？

（できれば今日は「哲学」ではなく「対話」呼びのほうに注目して）

- 「哲学対話」という呼称、しっくりきてますか？
- 「哲学対話」と呼ぶことのメリット／デメリットについてどう思いますか？
- その他なんでも…

余談：発表の準備のなかで思ったけれど、発表からはこぼれ落ちたもの

■ 「エッセイ」への着目：鷺田は哲学のモノローグ批判を通してダイアローグ（対話）に光をあてる文脈で同時に（論文と対比して）「エッセイ」にも注目している。

⇒ 哲学プラクティスの方法としての「エッセイ」？

■ 『みんなで考えよう』や『思考と対話』がリポジトリに引っかかってほしい。（切実）

■ 名づけることの権力・権威という問題。それに対する抵抗としてのわかりづらい名前、個々の屋号。

－ 今回の発表の（当初の）着想の一部は、以下の論文の「色彩を名づけ、さまざまな色名を強制し正当化する権力」という主題から得ています。

馬場靖人. 2020. “〈色盲〉の歴史研究から当事者研究へ 一色盲者の言葉を取り戻すために一.” 立命館言語文化研究 32 (3): 63–76.

# 参考文献

- 小川泰治(2023).なぜ「呼ばれたい名前」で呼び合うのか —哲学対話における名前と呼びかけの問題に向けて、『宇部工業高等専門学校研究報告』(69), 29-38.
- 小川泰治(2021).実感のある問いを、生きた言葉で—小石川中等教育学校, 『哲学対話と教育』 寺田俊郎編, 大阪大学出版会, 79-95.
- カフェフィロ編(2014)『哲学カフェのつくりかた』,大阪大学出版会.
- 寺田俊郎編(2021)『哲学対話と教育』,大阪大学出版会.
- 中岡成文編(2010)『ドキュメント臨床哲学』,大阪大学出版会.
- 本間直樹編(1999)『臨床哲学のメチエ Vol. 4』 大阪大学文学部 臨床哲学・倫理学研究室.
- 山本和則・小川泰治(2023). 哲学対話とセーフスペース, 『フィルカル』 (8-1), 114-140.
- 鷺田清一(1997). 聴くことのカ—<試み>としての哲学, 『臨床哲学ニューズレター』 創刊号, 5-28.
- 鷺田清一(1999). 哲学カフェ、その後, 『臨床哲学』 創刊号, 91-96.
- Haynes, J. and Murriss, K. (2011). The Provocation of an Epistemological Shift in Teacher Education through Philosophy with Children. *Journal of Philosophy of Education* 45 (2), 285-303.
- Vansieleghem, Nancy, and David Kennedy(2011). What Is Philosophy for Children, What Is Philosophy with Children-After Matthew Lipman?, *Journal of Philosophy of Education* 45 (2), 171–82.
- vania alarcón castillo(2020). filosofía y niños: ¿para o con?(Philosophy and Children: For or With?), *childhood & philosophy*(16), 1-29.